

人吉市長を5期務めた福永浩介氏が81歳で亡くなった。在任中、球磨川流域の市町村長でつくる川辺川ダム建設促進協議会会長としてリーダーシップを取り続けた。ただ、私の記憶には、会長就任前に見せた戸惑いの表情が強く残る。

福永氏が促進協会長に就任したのは市長1期目の1989年。人吉総局員だった私は設立総会の当日、市役所から会場のホテルまで球磨川に沿って福永氏と2人で歩いた。

福永氏の足取りが重かった。会長就任が内定していたが「ダムができたら私は何と言われるだろうか」と問ってきた。「ダムを造ってほしい人には恩人、そうでない人にはダムを造らせた男と言われるでしょう」と返した。澄み切った球磨川の水を眺めながら、福永氏は「だから会長になりたくないんだ」と言った。

「なぜ断らなかつたか」と尋ねると「外堀を埋められた」。首を縦に振らないため、流域の町村長が総掛

射程 球磨川流域の民意

かりで説得。「将来国政を目指すならまず人吉球磨をまとめる」と諭されたという。福永氏は覚悟を決めたように会場のホテルに入った。以後、促進協は流域を代表する形で事業を後押ししていく。

ただ当時、下流域ではダム推進、反対ともに表立った動きはなかった。数年後、反対運動が起きる。その波はじわじわと広がり、政治主導の促進協と民意のずれが浮き彫りになる。2008年、蒲島郁夫知事の反対表明を受けてダム建設は中止に。今思つと、福永氏は30年以上前、ダムに対する民意を、政治家の嗅覚でかぎとっていたのではないか。

7月豪雨後、促進協は川辺川ダム建設を含めた治水対策を求める決議を採択した。不安解消を自治体が求めるのは分かる。ただ流域住民が求める治水の形はさまざまだろう。ダムをめぐる混乱を繰り返し返さぬためにも、丁寧に民意をくみ取る作業が必要だ。

(木村彰宏)